

医聖華岡青洲の偉業

画期的治療と

診療録絵巻

田邊達三 / 華岡慶一 著



巻頭言

本書では華岡家所蔵の彩色奇患之図を現代外科学の視点で病態の解析と当時の外科的介入について解説するという試みを行った。全ての病態が克明な色彩図により鮮明に現代の我々に問いかけてくる。医学記録とはその時代においてできる限り正確かつ詳細な記録を残すことにより後世になって新たな視点で見て、現代の分類を可能ならしめるものでなければならない。

その意味において彩色奇患之図は十分に医学記録としての価値を持つと考えられる。当時は全身麻酔による患者無意識、無痛という外科介入にとって待望の状況提供が可能になったばかりの時代である。その状況で華岡青洲先生がどのような手術を行い工夫していったかを明らかにしたかった。それ故本書はこれまでの華岡青洲に関する著述とは一線を画する。

全身麻酔の成功の業績の輝きの中に紛れてこれまで必ずしも十分な研究がなされて来なかった青洲先生本来の業績である外科的起死回生の術に、実際の外科医の目で焦点を当てるのが目的である。

このようなテーマを実行する為に田邊達三北海道大学名誉教授にその解析・解明をお願いした。田邊先生は日本外科学会会長をはじめとする要職を歴任し日本外科学界のみならず世界の外科学界の泰斗であり、メスを置いた後も医学史、特に世界の外科医学史に関する深い造詣を駆使して、外科専門領域はもとより医学発展史に関する多数の著述がある。

第I部では、江戸時代の外科医たちが限られた情報の中でいかに起死回生の術を得んとするかの努力と苦悩を記述した。華岡青洲は活物窮理の目的で内外合一の一つの漢蘭折衷としての古医方と蘭学の関係で、様々なカテーテルをはじめとする西洋医学の知識、道具も活用し、自身でも改良開発していた。本書においても各手術手技に応じて西洋医学史にも造詣のある外科医の目で紹介した。顕微鏡観察のない時代、病原体感染症に対する消毒概念が成立する以前にプラグマティックに焼酎を用い、医療施設内に排泄物の浄化槽を整えたくだりはゼンメルワイスの悲劇を思うと内外の状況の差を考えても感慨深い。実験医学の概念のない時代にあっても活物窮理の精神で合理的にものを考え、動物実験を20年以上も続けながらも First In Man を躊躇った医者としての倫理観はまさに現代においても問われ続けている問題である。華岡青洲は上記の理念を教育の面でも活物窮理、内外合一の実践を通して厳しく門弟に説き指導した。第II部とも重なるが脱疽はまさにいち早く華岡青洲が記載したバージャー病と考えられ、自身で多くの切断術を行なったが門人の本間玄調が春林軒での実践を元に我が国で初めて脱疽患者の大腿切断術に成功している。

第II部は、彩色奇患之図から現代の外科医としての視点でそれぞれの疾患を推測し、各々の外科的処置の歴史を整理した

華岡青洲は外科医、麻酔科医、内科医、薬学者、教育者そして医塾、病院経営者などを兼任するマルチタレントである。

先祖の背中を追いかけるにしてもその全てを非力な小生が一人で担うのは到底及ぶと

ころではない。私自身は循環器内科医であるが、田邊先生門下の心臓血管外科医である松居喜郎北大教授を今般定年退官前に当法人の院長に招聘し、後輩の心臓外科チームとすでに活動中の当院の内科チームとともにハートチームとして内外合一を現代において実現しようとしている。

華岡青洲の時代には外科学の聖域だった心臓に、我々はチャレンジしている。西洋の解剖書や腑分けによる解剖の知識がやっと広まった時代から見るとCT、MRI、超音波検査で内臓の奥深くを非侵襲的に診断し、血管造影装置でカテーテルを通して治療器具を心臓の奥深くに送り込んだり、開胸し心臓を止めながら心臓直達手術を行う姿を見たとき、彼は一体どう思うのだろう。

きっと最初は驚いた風であろうがすぐさま我々の未熟を指摘し、新たな可能性を示すに違いない。技術の進歩とはそのようなものだろう。大事なのは立ち向かう精神だ。

第I部の中では先陣を走るパイオニアの活動は勇氣、氣力、知識を駆使して行われるものでありその偉業は武士でもある華岡青洲の画期的な行動力と決断力に支えられていると記した。

松居喜郎北海道大学名誉教授は座右の銘として Boys, be ambitious! Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be. (少年よ、大志を抱け！金や私欲のためではなく、名声などと呼ばれる空しいものでもなく。人間として当然持つべきもののために大志を抱け。) を挙げている。母校の創立貢献者の言葉であるが(後半部分は諸説あり)、クラーク先生の語録と行動を調べていたら先生はなかなかの行動家で波瀾万丈の人生を送ったようだ。言葉の含意を味わうために語源と調べると、ambは彼方此方いろいろなところに、itは行く、出向く事であり、大志とは目的をもって彼方此方行って行動する事だそうである。なかなか含蓄のある言葉である。

本書では“手術・外科学”という“**Te-chn-ology**”の進歩も語られてきたが第I部にあるように一番重要なことはいつの時代もそれに立ち向かう精神である。我々は技術的には間違いを犯しながらも前に進んでいる。しかしながら Technology の進歩は後戻りできなくてもそれを生み出す精神“**spir-it**”は人間が大きく進化してない以上、過去と同様のかたちで“**呼吸し続け**”ているのだろう。我々は青洲の精神を踏まえ現代における起死回生の術を追い求めていきたい。

第三代隨賢 華岡青洲が詠んだ私の好きな七言絶句がある。

技術を求めて薬草、文献を涉獵する姿はまさに ambit かと。これを紹介して巻頭言とします。

竹屋蕭然烏雀喧
風光自適臥寒村
唯思起死回生術
何望輕裘肥馬門

(華岡青洲文献保存会による読み下し文・現代文の解説は本文10ページをご覧ください)

医療法人 春林会 理事長
第九代隨賢 華 岡 慶 一